

法然さまの一枚起請文

いちまいきしょうもん

目次

渾身 こんしん の誓い	1
一枚起請文	2
一 お念仏って、ひとつじゃないの？	5
二 「念」は「となえる」こと	9
三 「起請文」たるゆえん	14
四 自分はどれほどのもの？	18
五 正真正銘の「証文」	22

渾身の誓い

「起請文^{きしょうもん}」とは聞きなれない言葉ですね。これは「私の言っていることが嘘^{うそ}や偽り^{いつわ}であつたなら、どんな罰^{ばつ}でもお受け致します」と神仏に誓いを立てた、いわば誓約文のこと。誓約した人（書いた人）の真摯^{しんし}で誠実な姿勢が表れるものです。

この「起請文」を、私たちの浄土宗を開いた法然上人^{ほうねんしやうにん}（1133—1212）も書かれています。何を誓ったのか、ですって？

詳しくは、これから読み進めていきますが、「私は、西方極樂浄土^{さいほうごくらくじやうど}の阿弥陀^{あみだ}さまに救い導いていただくためには、南無阿弥陀仏^{なむあみだぶつ}と念仏をとなえればよい」と説いてきました。これ（念仏をとなえること）以外には、何も他の教えや奥義^{おくぎ}を隠したりなどしていないことを誓います」というもの。「すべての人に仏の救いを」の一心で、念仏の教えを広めることに生涯を賭^とした上人の、渾身の誓いということができます。

では、実際に読んでみましょう。

一枚起請文

唐土我朝に、もろもろの智者達の、沙汰し申さるる觀念の念にも
あらず。また學問をして、念のこころを悟りて申す念仏にもあらず。
ただ往生極樂のためには、南無阿彌陀仏と申して、うたがひなく
往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず。ただし三心四
修と申すことの候うは、皆決定して南無阿彌陀仏にて往生するぞと
思ふうちにもり候うなり。この外に奥ふかき事を存ぜば、二尊の
あわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。念仏を信ぜん人は、たと

い一代いちだいの法ほうをよくよく学がくすとも、一文不知いちもんふちの愚鈍ぐどんの身みになして、尼あま
入道にゅうどうの無智むちのともがらに同じおなうして、智者ちしやのふるまいをせずして
ただ一向いっこうに念仏ねんぶつすべし。

証しょうのために両手印りょうしゅいんをもつてす。

浄土宗じょうどしゅうの安心起行あんじんきぎやうこの一紙いっしに至極しごくせり。源空げんくうが所存しよぞん、この外ほかに全まった
く別義べつぎを存ぞんぜず、滅後めつごの邪義じゃぎをふせがんがために所存しよぞんをしるし畢おわん
ぬ。

建曆二年正月二十三日
けんりやくにねんしょうがつにじゅうさんにち

大師だいし在御判ざいごはん
だいしざいごはん

古文こぶんに加え、ところどころ仏教語が使われていますから、完全に意味をとるの

は難しいかもしれません。しかし、テンポのよい流れと言葉づかいに、親しみを感じていただけるのではないのでしょうか。何度でも、そして声に出して読まれることをおすすめします。暗誦あんしやうできるとなれば、なおいいですね。

法然上人は、政治が乱れ、戦いくさや天災が度重なり、民衆が苦しい生活を強しいられていた平安時代末期、浄土宗を開いてお念仏の教えを説き広めました。その八十年の生涯を閉じようとする直前のこと、長年そばに仕つかえてきた弟子の勢せい観房源智上人かんぼうげんち（1183—1238）が、一つのお願いをしました。

「お師匠さま、ぜひともこの源智のために、お念仏の教えの肝要を書き遺のこしてくださいませ」

上人が往生を遂げる二日前、建暦二年一月二十三日のことでした。愛弟子まなでしの切なる願いに応え、病床から力を振り絞るように起き、したためられたのがこの「一枚起請文」です。一枚の紙に書かれていることから、そう呼ばれています。「御誓言ごせいごんの書しよ」とも言われます。弟子に託した遺訓ゆいくんとも言えるものです。源智上人はこれを常に首にさげ、生涯大切にしましたといっています。